

死亡 六四一人 入院 四九二人

転属 一七四五人 生死不明 八九人

残留(所属不明) 二九人

第四十師団歩兵第二三四連隊長

陸軍大佐 西川俊元

終戦後の状況

二十年八月十九日 江西省南昌県樓下萬出発

八月二十八日～三十日 江西省九江

九月十九日～十一月十六日 安徽省蕪湖県蕪湖

十一月十七日～二十一年二月九日 安徽省当塗県馬

鞍山

二月十日～五月六日

南京市政府工務局二部隊徵用服務

五月七日 南京出発 五月九日 上海着

五月十五日より五月十八日 上海出帆

鹿児島及博多に上陸(四隊に分離)

中国戦線参戦記録

島根県 上代 芳房

私は大正二年六月十五日生まれで、徴兵検査は第二乙種の第二補充兵でした。昭和十七年七月一日、浜田市の歩兵第二十一連隊第二機関銃中隊へ、三十歳で妻と子供三人の身で応召しました。その当時の私の家庭は、

家の職業	農業(水田九反 畑三反 養蚕)
家族	祖父 死亡
	祖母 健在
養父	五十六歳
養母	五十二歳
本人	三十歳
妻	三十歳
子供	男児 五歳 二歳 一歳

で養父は養蚕指導員をしていました。右のようなこと

で私が兵役で家庭をぬけると、苦しい状態でした。

思い起こせば、支那事変の戦火が上がったのは昭和十二年七月。現地では戦線は拡大する一方で、やがて米、英との戦争にまで発展し、銃後の生活は国家総動員の名の下に、食料増産に総力をあげ、一方では次から次へと召集令状で家庭を捨て、家族と別離の苦しい生活の時代となっていきました。

わが家は、水田は二毛作で麦や馬鈴薯も作り、昭和十七年六月十九日召集令状が来た時は、未だ田植えの真っ最中。戦況も酣たげなの時期で、昭和十七年七月一日、浜田連隊への入隊通知でした。私は第二乙の補充兵役であり三十歳。当時は予備役の四十三歳もの人々も出征する時代でもありました。田植えも早々にして、神社仏閣へのお詣り祈願でした。一方では、千人針とて腹巻布に千人の糸をつなぎ縫いで、女性が多忙を極めました。実家の姉姉への挨拶やら、身辺の整理もあり、ご近所への連絡とか、さらに男の子供二人に後ろ髪を引かれる気持ちは感無量のものがありました。支那事変勃発時は長い轍を立てて、見送り行列も盛大でした

が、その当時は秘密裡の見送り風景で、氏神様へ部落の人々と共に参拜、大東駅までの見送りを受け、同時応召は二人、私が代表で覚悟の挨拶、感激の至りでありました。

養父と長男は六道駅まで見送ってくれ、実母もまた来てくれて親子の涙の別れでした。私自身は田植え上げのためか、体重は驚くなかれ三十八キロ七〇〇グラムと軽く、妻の心配は格別でしたが、私はもしかすると即日帰郷ではと、戦々恐々の心地でした。結果は難なく入隊でした。一応ホッとするやら、家庭の行く先を思うやら、複雑な心境でした。

めでたく入隊しましたが、配属が第二機関銃中隊で馬部隊であり、心中これは困ったことと思いました。後で考えると、馬部隊はすべてが楽な点が多くよかったと思いきらいでした。

重機関銃は銃身が二〇キロ、脚が二六キロですが、銃身と脚は銃馬に、弾薬は二頭の弾薬馬に載せて運ぶので、兵はシャガの軍装で身軽な行軍ができます。

日常の生活は超多忙で烈しく、朝夕の馬の手入れで

大変な日課です。入浴時はいつも順番が後の方で、小銃隊が先に入るので湯はドロドロで量も少なくなっていました。その反面乗馬運動の際、乗馬での愉快さはすべての苦勞を忘れることができるほどの喜びでした。

私は第二機関銃中隊第一班で、新兵十三人、古兵も同数ぐらいました。最初の一週間は小銃教育ですが、後は重機の教育に移ります。精密な構造で発火の際の爆発風圧で次弾を装填し、四秒間に自動的に三十発を発射できます。その発射音は山鳴りの大音響で、重機が出動せぬと敵も退かないほどであり、花形部隊でしたが教育は大変でミリ計算などでやらねばなりませんでした。

青井見習士官が教官で、私を非常に可愛がってくれました。一期の検閲が八月末にあり、終戦後、復員して帰宅後知った事ですが、浜田の連隊での新兵で一番の成績であった由。不断の努力が実を結んだのだと思います。

支那派遣の命令が九月二十日に出ました。当日は私達新兵は射撃場で射撃訓練のところ、直ちに帰営、家

庭整理との名目で今だかつてない三泊四日の外泊を許され、九月二十四日帰郷しました。よく聞いてみると、第二機中隊からは私一人で独立歩兵第一二二大隊へ転属でした。

帰宅してみると、養蚕で忙しい最中でした。私の入隊後、養父が隊へ面会に来て十円札をくれたり、新兵の浅ましき！古兵の目ばかりを心配する私の様子を見て、父は可哀想でならない気持ちであったようです。帰宅すると子供たちは何だか恐れをなすようで、親子の馴染みがなく、妻や両親とも多忙のためか十分な対話の機会もなく物足りぬ心境のまま帰営したものです。帰隊後は別室生活で訓練もなくごろごろと、する事もなく数日を読書三昧で過ごしました。

十月五日連隊を出発しました。この朝、大己中隊長に呼ばれ第二機中隊より第七一五三部隊への転属は私唯一人であること。戦地の中隊長は清原清悦中尉と言い、穴道の妙嚴寺の和尚さんであること。その他いろいろと野戦の注意説明もあり、今回の浜田連隊より第七一五三部隊への転属者六〇〇人の指揮班長として渡

支せよとの説諭あり、私は大変なことになったと驚き入ったと共に、中隊長や教官の厚い情に応えるべく頑張るほかは無いと決心しました。

いよいよ宮門より外へ出征です。輸送指揮官鈴木中尉、石飛軍曹、私の班長の三人が引率者で、先頭は十二人のラッパ卒、六〇〇人の四列縦隊で浜田駅まで堂々の行進でした。実に威風堂々、武勳輝く浜田連隊の赫々たる伝統をしっかりと心身に叩き込んだ山陰健児の出陣でした。この感激は忘れることのない思い出として、今なおくっきりと鮮明に覚えています。駅頭では、青井教官が見送りに来て別れの挨拶、写真などをくれたりして大層親身に可愛がり、私の胸も感無量となりました。私が射撃の時、ミリ計算で的確に命中方式の早さに優れていたこと、浜田第二十一連隊の厳しい内務にもよく抜け出ていたこと、などが教官の心証をよくしたことであろうと思われました。

山口連隊、広島連隊と合流して宇品港より一万トンの貨物船に乗船。二千人の部隊も案に収容、二段に仕切った船倉での生活は輸送船特有の体験。宇品を出て

から四国沖三日間、九州沖四日間の滞在で、浜田を出てからは一週間、十月十二日やっと九州を離れ玄界灘へ。海水が黄色に変わって、揚子江の入口でした。船内の生活では、毎朝各隊交替で体操をし、班長として私の外に十三人の指揮班員を号合せねばならず、毎日勉強しながらの任務達成でした。伝令の任務では、船中の長い距離には閉口したものです。

十月十三日早くも上海へ上陸し宿舎へ。一泊すると輸送指揮官鈴木中尉以下指揮官は全員日本へ帰還します。以後は指揮班員十三人を指揮して引率。六〇〇人の隊員は三個大隊に分散し、第一二二大隊（槍七一九三部隊）への派遣でした。私は指揮班長としての大任を全神経を集中して、試行錯誤を繰り返しつつ、どうにか十五日上海を出発、中国船の鎮海号に乗船、客船のような船に恵まりましたが、支那人ばかりの船員であり、二日間の乗船でしたが、言葉、食事、その他に困り悩みながら杭州湾の寧波へ上陸下船、いろいろと苦勞を積み重ねてやっと宿舎へ辿り着き、直ちに申告しました。

その時、私の声を聞いて出てきた同郷同隣保の伊藤伝太郎氏と遠い他国で会うことができ、夢のようでした。伊藤二等兵は第七一五三部隊の無線班で、上海へ教育移動中偶然一緒になったとのこと。炊事場、物品倉庫、菓子など、案内やらおぐるやら親切に接してくれて、私の株も上がり、十三人の者も胸をなで下ろしていました。

目的地の第一二二大隊は、ここより更に奥地三〇里の浙江省嵊県城にあります。貨物自動車に便乗し、冬の荷物の上段へ乗り二泊しながらの進軍です。その間敵の射撃を受けながらで、初めての事でもあり荷物の最上段のこと、身の丸出しで恐ろしいことの上なして、荷物の中へ潜り込む始末です。そして三日目、上海を出てから五日目、やっと支那派遣軍第一二二大隊へ到着しました。転属の申告をして、度重なる心労とお別れをし、万感胸に迫るものがありました。

大隊長大寺中佐の前で張り切ったの申告。中隊配属は私と松江の錦織権一君の二人が重機中隊へ、他の者はすべて小銃隊でした。中隊長は穴道妙厳寺のお坊さ

んで、私と同じく養子で子供も二人、第一小隊第一班へ入隊、その上私の隣の戦友が大東の古山晃之助氏であるとのこと、私のラッキーぶりには驚きました。

ところは支那浙江省嵊県。小高い山の傾斜地の市街地で繁華なところ、支那特有の城壁に囲まれ五重の塔が建っています。兵舎は五個の小銃中隊、歩兵砲、そして重機です。第一線の最前線でした。城壁の外は危険地帯、休日でも外出禁止区域。馬は三十六頭いました。私は中隊当番を命ぜられ、曹長二、伍長一、兵長一、上等兵と賑やかでよい勉強になりました。県職員などの公務員が事務勤務のようでした。掃除、伝令などと毎日頑張りました。衛兵所勤務もあり、兵として公平にすべての任務に習熟させられました。

馬といえは、四〇頭近くいましたが、ける、かむ、抱き込むなどの特有の癖があり、それぞれの名前があり、それらを全部覚え込まなければなりません。

十二月ごろ、再三の情報により出動することとなり、夜中の三時起床、払暁攻撃でした。浙江省は山また山で上り下りの激しい山道、しかも幅一メートルぐらい

の石畳道で、何里行っても石畳道。ズック靴で足音を秘しての行軍。馬は留守。銃は分解搬送で苦しかった事は忘れられません。急坂は上りより下りが辛い。急坂ばかりの山岳戦。払暁に目的地へ入ると、敵は既に退散し、スパイ網の所為か、支那人は機敏です。

我々の部隊は元来、昭和十七年四月の浙江作戦で編成されたもので、浜田・山口・広島の混成で、その他大阪もあり、我が中隊は浜田が中心のようでした。出雲言葉でなめられることも再三でした。私たちは田舎者で炭焼きを命ぜられ、よく精励したものです。

支那は薄夜または白夜ともいい、月夜でなくても遠方がうすうすと窺えます。分哨で立哨すると、敵が来るのに便利で、自分も敵の目にさらされることになり、夜間週番司令の随行兵として遠く離れた分哨、城壁上の分哨を巡視するのは大変でした。野戦のことで友軍から撃たれることもありました。

いろいろと頑張っていると、昭和十七年十二月一日付で一等兵に進級。星二つになり初めて兵隊のような気になり、また支那人側からも認められました。それ

だけに責任も勤務も重く多くなりました。

昭和十七年十二月より翌三月ごろまでは警備討伐に明け暮れ、集落市街の焼却もたびたびでした。

昭和十八年三月杭州市笕橋へ移駐、飛行場もあり、早田中尉の当番兵となりました。五月、六月は海杭沿線の討伐で数度の戦闘も経験、このころマラリアに罹患しました。四〇度の熱に苛まれましたが部隊と共に行軍せねば敵中に取り残されるので必死の戦いでした。

昭和十八年九月より十二月まで広徳作戦、常徳作戦に参加、その最中の十二月一日上等兵となりました。

早い進級で古兵連中の恨み、ねたみを買いました。

杭州を出発して間もなく蘇州通過の際、バツタの大群と会いました。言葉に尽くせない有様で、支那大陸の広い原野が真っ暗くなるほどで、見る見るうちに青物は食い尽くされ、大陸の非情さを身に沁みて知ったものです。南京で乗船し揚子江を漢口で上陸、湖北省当陽県鴉鵲嶺アジャクシヤへと一週間の行軍の途中、足にまめができてそれが甲に回り、靴を脱ぐと次に履けないくらい腫れ上がります。小銃中隊の兵も倒れるぐらいの難行

軍。馬部隊はそれでも馬の世話で水飼いその他と忙しく、やっと一服と思うとはや出発です。

十二月十三日、最前線の營盤崗での戦闘で、私は一番熾烈な体験で、半日間岩のくぼみに身を隠したままでした。この戦闘で第一中隊長戦死、私の中隊でも酒本伍長戦死、その他の負傷も多かった由。この戦闘で野戦重砲六門の支援を受けましたが負け戦でした。退却時の迫撃砲で追われるあの恐ろしさは忘れられませんが。

迫撃砲の弾丸の直径は八寸もあり、水田に落ちると電柱の如き水柱が立ちます。その飛沫音は笹を振り回す如き音で、サラサラと頭上を越す場合には目に見えないほどの音で、気味の悪いことこの上ないものでした。迫撃砲はその着弾が近い遠いと統一直線で、横への幅はないので、避難のコツがあります。新兵が来るごとにこの要領を教えます。とにかく横へ避難せよと命令したものです。馴れてくると発射の地点の方向も距離も判明してきます。すべて熟練です。実戦では誰もがのぼせ気味となり、集団行動はなかなか難しいもので

した。

鴉鵲嶺では敵の夜襲を受け大混乱で自分の鉄兜が見当たらない大騒ぎ、一応重機も出しましたが、目前まで敵が押し寄せるほどに狼狽するものでした。この日は敵味方入り乱れての乱戦で、敵の第一線の正規軍の精強さは浙江省辺りの匪賊とは比べ物にならぬもの。当然我が方も本腰にならざるを得ません。

十二月三十日漢口着。川上曹長は准尉となり、私は准尉の当番を命ぜられ、勤務や馬の手入れともお別れの楽チンの毎日でした。

昭和十九年一月末ごろ、杭州市へ帰營、また付近の討伐に奔走しました。ここ杭州は水都であり、西湖という有名な湖があり、支那特有の飾りのある遊覧船が浮かび、山の中腹に蔣介石夫人宋美齡の物凄い邸宅があり、塔もあり、ちょうど松江の水都の如く、六道湖ぐらいの湖でした。馬の運動などでは景色も道もすべて良く、乗馬姿が思い起こされますが、その写真を焼いてしまったのが口惜しい限りです。

准尉当番から中隊長当番に変わり、点呼もなく自由

な生活となりました。清原中隊長には非常に可愛がってもらいました。

中隊長の馬は白毛の馬でとてもやさしい馬でした。乗馬運動の時は馬せんは敷かれませんが、鞍があり鐙がついていて大層楽です。駄馬の中でも安秋号という銃馬は非常に背が弱く、しかしクッションがよくスプリングが利くので乗馬に適していました。普通の馬は腰が強くてガタガタするのが多く、乗馬になると乗っけてもふんわりするようでした。恐ろしい馬に共華号と名のある馬がいて、走って来て立ち上がり抱き付く癖があり大変恐れられて、共華号の馬持ちは兵長になれるとさえ言われました。また、嘔むことも烈しく馬の二度嘔みと言って、初めは軽く二度目は絶対に離さないように嘔むので、特に注意しました。その他蹴る馬もあり、二本の足で同時に蹴るので始末が悪いのです。戦闘中は赤色の布を着用して注意信号とするのです。小銃隊が近くまで来て「この馬はどうか」と聞いているところを蹴飛ばされることも度々でした。

昭和十八年の初めごろから同十九年三月ごろまでは、

海杭沿線の討伐に忙しい期間でした。

中隊は三個小隊編成であり、第一小隊長は野村少尉（寛橋駐屯時代は早田中尉が小隊長であったが、病身で討伐は毎度不参加であった）、第二小隊長は石橋久郎少尉（後で中尉となる）、第三小隊長は橋本少尉とあったところでした。

重機関銃は、一個小隊に二個班で二機があり、一個中隊で六機であります。馬は銃馬一、駄馬二が一機につきまます。兵は一機当たり銃側四人、馬持ち三人で、これが平坦地の編成ですが、山間地搬送になると銃側四人で分解搬送、弾薬箱は二〇連を減らして一三連ぐらいを入れ、四箱を搬送する形式。遠征ともなれば、現地支那人を徴発して苦力として加勢してもらいます。苦力の中から監督を選んで統制、兵の私物を持たせたりしました。兵器はあくまで兵隊の責任で運びます。この杭州駐留時代が最も思い出深く、また長い時期でした。

昭和十九年三月、杭州出発、蘭溪、蘭溪、蘭溪で警備。長い広い河をはさんでの第一線でした。支那の上流人の

避暑別荘地帯のようで、良い市街地もかなり破損して
いました。中隊長は魚が好きで、隊長と当番の私と二
人で湖や川で釣りをしたり、手榴弾を使ったり、時に
はダイナマイトまで利用したこともありました。手榴
弾は四秒で破裂するものを、三秒まで手に持って投げ
ます。今思えばよくやったものと空恵ろしくなります。
魚は良く獲れて中隊長の炊事に貢献しました。

昭和十九年の夏、衢州作戦参加。金華方面よりの戦
闘で終始敵の迫撃砲に悩まされ通したと記憶していま
す。戦死者も出て、火葬にするとその煙へ迫撃砲が飛
んでくる苦戦ぶりでした。山の稜線を越す場合は、二
人目が最も危なくて、負傷者は必ず二人目でした。敵
は水冷式機関銃を用い、弾は帯状のものを詰め込んで、
続けて何十分でも発射するので始末が悪いものでした。
余談ですが、日本軍のあまりの急進撃に支那住民も
慌てて逃走するため、貴重財産を隠匿して行きます。

田圃の稲の中に隠した壺を開けると、一元金貨が二三
八枚もあり、山道を逃げる住民を追い散らした時、漁
網の中に金貨を入れているのを発見したり、豚や鶏な

どはお手のもので捕り放題。駐屯地よりも高級な食事
にありついたものでした。反面、夜の食事に舌鼓を打っ
て満腹し、朝起きて見渡せば水源に豚の死体が浮いて
いたり、戦場はもう目茶苦茶でした。

衢州市街へ近づくと、激烈な戦闘となり、師団
長が戦死するなど大変でした。私の隊でも田中上等兵
戦死。この烈しい戦いで水田には、まるで草取りする
ような格好で支那兵の死体が並んでいました。戦闘中
広い原野を進撃するのに、中隊長は先頭切って進むた
め、当番の私は否応なしに二人一塊で追隨します。二
人一緒だと敵弾が集中してきます。水田の中など水し
ぶきが着弾点を示します。恐ろしいことでした。小溝
を見つけては二人とも水の中へ這いつくばり、数回銃
かけてやっとのこと山陰へ取り付きます。迫撃砲にやら
れて隊長と別れ別れになったりしました。夜間谷を問
違えて敵中に潜入し、私も六人の周囲はすべて支那
語ばかり。もう死んだ気持ちになり、手榴弾の安全栓
を抜いて握りしめたりして、深い溝へ隠れて夜明けと
なり、彼我入り乱れての格闘、白兵戦もあり、出雲の

神仏のおかげで生き残れたと感謝合掌でした。

夜間行軍は道標に白紙を切り裂いて撒き散らすのですが、あまりの暗さで判りにくく、雨天の夜はもう処置なしでした。

やがて、金華飛行場の第四中隊へMG一個小隊で対空射撃部隊として配属されました。案になったと喜んだものです。金華には駅があり、米空軍のハリケーンが低空で襲来して来るので発見しにくくて困りました。高空を来ず、谷間をくぐるように低く来ます。撃っても弾丸は敵機の後方ばかり。曳光弾を用いてもだめでした。

配属が終わり本隊へ帰ることとなりました。近郷部落の討伐で、敵の重要人物が妾宅等へ来るが、情報が入り次第包圍しても、逃げ足が早くて効果なしです。女どもを捕らえて電源から電線を足の指につないでは、折檻しますが黙々と反応なしで、死すとも語らずとの形相でした。

昭和二十年二月二十八日、槍七一五三部隊の再編成が広範囲にあり、一二〇〇人もの大移動で独立歩兵第

六〇八大隊の要員として転出しました。清原中隊長は歩兵砲中隊長となり、お別れが心残りでした。私は中隊に残りました。

これより先の二月十五日、先発隊の一員として嘉興市へ出発、寺院や原住民の建物を利用して、兵舎や厩に改造の大奮闘をしました。この時本隊の移動用列車がテロにより爆破され、馬と兵が吹っ飛んだとのニュースを聞いて、先発隊一同強運を祝い喜んだものです。

昭和二十年八月十五日は嘉興の駅付近へ公用外出中のところ、他の部隊の将校より「今日は重大放送があることを知っているか」と言われてビックリ、早々と帰隊。放送は雑音がひどくて全然不明、戦争中止のことなど夢にも考えずにいきました。中隊長集合のラッパが鳴り、日本が負けたとのこと。支那派遣軍は勝ち続けており、戦闘は続行の体勢で、内地より在支部隊に戦闘中止の命令が来るとのことでした。

この時、我が部隊はすでに満州への移動命令が下り、八月二十日津浦線へ向け出発の予定で、軍装も全部新品に取り替え、残りはすべて焼き捨てるなど全くでた

らめなことでした。やがて津浦線擁護作戦となりました。日本軍は敗戦国軍、中国は戦勝国という立場逆転で、列車輸送（無蓋貨車）の我々に、支那の子供までが横柄になり、橋の上から列車目掛けて放尿して我々は怒りを押さえて残念がったものです。停車駅では品物を強引に盗まれるなど、略奪され放題で北上しました。毛布を盗まれるのが最も辛かったものです。

固鎮を過ぎ、次の次の駅まで北上し、江蘇省徐州付近の警備につきました。新四軍とか八路軍とかの共産軍との討伐で九月十四日ごろ、鉄道より二里ぐらいの山地で最後の重機の発射をやりました。

満州派遣の件もここで中止となりました。実に幸運でした。ちよつとの違いでシベリア行きを免れた訳です。

九月二十七日、曹村を出発、南下して安徽省固鎮の集中営に捕虜としての駐留となりました。ラッキーなことに親日派の湯恩伯が收容所長として着任、作業はなく野球・相撲・芝居などに毎日を楽しく過ごしました。この時メリケン粉で碁石を作り、碁の勉強をしま

した。復員帰宅後もこの時の恩恵に浴しています。

十一月十五日、武装解除で兵器引き渡しで苦業を共にした馬とも別れ、彼らの行く末の幸せを祈りました。ここでは穴部屋生活同然で何もする事がないので、碁・カルタ・川柳などで気を紛らわしました。川柳では賞をもらったことがあります。その句は今なお忘れられません。

子の手紙 家族揃って 囲炉裏端

正月もいつの間にか過ぎ、少しの私物もすべて食物と交換して淋しくなり、しきりと復員のデマが飛び交う一月ごろ。二月十日上海集結の命令が出て、一同の表情も活気づきました。

二月十二日いよいよ出発で身辺整理で大変。戦利品は一切駄目です、象牙製品等惜しいものを整理せざるを得ませんでした。無蓋車の列車で南下中、支那の子供の心ない暴行も甘受しました。抵抗は一切禁止の厳命で、復員停止の報復を受けぬように全員の連帯責任でした。駅では時計と万年筆を要求され、恐ろしい見幕で無理強いするのでどうにもなりません。私は巻脚絆

の下へ入れていたので助かりました。将校の中には行李を担いで逃げられるのを追いかけることもできず、残酷この上ない次第でした。

車中二日間、やっと上海着。兵站宿舎で大豆飯です。湯をかけて大豆と飯を分けて食べました。私物検査も嚴重に数回やられます。大事な写真などはその必要もないのに焼いて後悔、残念至極でした。最後に米軍の検査となり電磁石を使うなど物々しく、私は逃げたい気持ちでした。米軍のトラックを見れば、車輪が十個もあり、初めて見るごととてビックリしました。その後は上海港へ直行です。港では日本兵でごったがえしていました。

波止場はどこやら、前の兵から離れないことで精いっぱい、ウースン港で乗船経路に苦労しつつ、四本マストの遠洋航海の「日本丸（商船学校）三〇〇〇トン」の堂々たる船に思わず万歳を叫びながら友と喜び合いました。船中ではようやく横になる程度の空間の狭さでしたが、これでやっと帰国できると思うと心ははや故郷に、父母・妻子供の上にと飛んで走馬灯のように

浮かんで消えて、眠れずにいきました。揚子江へ出て、天候の回復を待つて外海へ出ます。黄海では山なす波と闘い、船中へ水が流入します。四十五度傾き、もはや沈むかと思うこともたびたびでした。

昭和十七年十月の渡支の折は一夜でしたが、今度は悪戦苦闘、やっと三月二十一日鹿児島港着。折しも桜島火山の大噴火の最中、ゴーゴーという山鳴りがひっきりなしで、道路も庭も屋根も駅もすべて物凄い火山灰が高く積もっていました。一泊して、従軍証明書の交付があり、私物の確保もあって騒々しいことこの上ありません。これで中隊解除となり兵歴の離脱であり、一般日本人になりました。

さて、復員行です。

一路ひた走りに北上、熊本駅もどこへやら関門トンネルを十五分で走破、下関で昼食。郵便局で電報を頼むと、汽車の方が早いとのことで電報は止めて山陰線に飛び乗りました。驚いたのは交通規律が乱れて、おばさんなど窓から荷物を投げ込む有様。車窓から見ると石見辺りは昭和十九年の水害の跡が生々しく残って

いました。宍道で丁度運良く木次線の最終列車に間に合い、大東の古山晃之助氏と固く手を握って万感無量の故郷でした。途中で大東下分の畳屋（坪中）へ帰国の通知に寄り、自宅へは午後十時に着きました。

「帰りました」の声に真っ先に出てきてくれたのが都子とアサ子（妻）。養父が生死の境であるので、早く上がれとのこと。三年九カ月ぶりもこの有様。父は頗る気分は確かでその第一声は「時計はどうしたか」というのは、入隊前、当時三十五円で高価であった（米一俵、五円くらいであった）し、今の相場でも米一俵二万×七俵で十四万円のよい品物であったからでした。丁度腕に巻いていたので、見て嬉しがる父の顔を見て、泣けてどうすることもできませんでした。よくもまあ、巻脚絆の下に隠して略奪から守ったものと神や仏に感謝しました。

「明朝はお前の手であの漬け物で食べたい。早く休むがよい」と。父の愛の感極まったことでした。父は頭は確かでしたが、遺言らしいことは何一つ無く、午前十一時五十分他界しました。私は上海乗船以来、ほ

とんど眠っておらず、また葬儀のことも不案内で、野戦ボケそのままでの送りであり、今も何一つ覚えていません。どうしたのか記憶にないのです。近隣の人や武田茂君の援助でどうにか葬儀は終わりましたが、後始末、近隣へのお礼など少しも覚えていません。

子供たちは小学校へ通っていましたが、物資の少ない時世であり、魚まで配給の淋しき、着物は改造したりツギハギでした。女性はモンペ姿で、私とて支那人の再来のような妙な気持ちでした。子供たちが言うことには、僕の思っていたお父さんではない、と言う次第。実に四年近い留守宅の変わった様子が実感されま

した。
現在、私は農業の隠居で八十五歳、土地改良に五年、民生委員に九年、妻も同じ八十五歳で共に元氣にしております。子供は三男一女、孫は七人。平凡な幸せに恵まれ、支那の戦地に散った戦友の御霊に感謝の毎日です。蛇足ながら私の実家の父は中林忠太郎と言ひ尼子氏（中国の戦国大名として山陰を制していた）の家老の子孫で九代目とか。昔は随分と頑張っていたよう

でした。

中支山砲兵隊

戦後蔣介石軍の馬教育

栃木県 井上 道太郎

生まれは栃木県の温泉地塩原町大貫六という所で、大正十一年十二月二十九日、あと数日で大正十二年正月という日でありました。家は農家ではありませんが、天理教の教師でもありました。昭和十七年十二月、矢板体育館で百人以上の壮丁が集まり（遠方の栗山村からも来ていた）、体格に自信があったので予想したとおり甲種合格二番でありました。

私は、家業の農業はせず、東京の豊島区目白の工場でモーターの捲線工として修業をしていました。入隊は昭和十八年十二月ということで、東京駅に集合は十二月八日と決められておりました。本来なら、どこそこの部隊というのですが、企図を秘匿するためだっ

たのでしょうか。

第一回集合場所の東京駅には東北、関東の人たち、栃木県からは九人ということで、駅には兵事係の軍人が待っていました。第二回目の集合場所は九州の門司です。民家へ二泊し、そこで初めて軍服に着替えさせられ、やっと兵隊の服装となりました。十二月十一日朝、門司港で乗船。

玄界灘を渡り釜山に上陸、鉄道で朝鮮半島を北上、鴨緑江を渡れば南満州、更に鉄道で西へ、満支国境山海関を越えればもう北支です。河北省に入れば石門で、そこに部隊本部がありました。部隊は独立山砲第二大隊でした。我々初年兵が四、五十人で、六個班あり、一個班七人宛ぐらいいったと記憶しております。

石門に十日ぐらい居て、中支へ移動となり、京漢線で揚子江を渡り、湖北省咸寧で教育をされました。教育隊では山砲、野砲、重砲の兵隊が教育されました。私は山砲ですので、四一式山砲について三カ月間教育を受けます。一応全般に亘って教わるのですが、結局は五番砲手ということで、砲弾の信管切りが担当であ